

## 遺骨と遺された人々のつながり ～ソロモン諸島ガダルカナル島における遺骨収集活動を事例に～

深田淳太郎

第二次世界大戦の間、日本からは多くの人々が兵隊として出征し、そのまま帰ることなく海外でその命を落とした。日本人の全戦没者 310 万人のうち、海外（沖縄を含む）での戦没者は 240 万人にもものぼる。その中で 2013 年の時点で日本に「帰還」したとされるのは約半数の 127 万人に過ぎず、現在も 110 万人以上の遺骨が海外に残されている。日本政府は 1952 年以降、数次に渡って、海外での「遺骨収集帰還」事業を実施してきたが、それらは外交上の事情あるいは予算や人員などの制約から、徹底したものにはならず、未だにすべての遺骨を収容するには至っていない。

ところで、波平（2004<sup>1</sup>）はこの「遺骨」という語について、それが「亡骸」や「死体」と異なるのは、誰かに「遺されて」いる点にあると論じている。この考え方に従えば、異国の土の下に埋まっている骨を「遺骨」と呼ぶのは、それが誰かに向けて「遺されて」いるからに他ならない。

ではこの「遺骨」はいったい誰に向けて遺されているのか。第一に考えられるのは、戦没者の妻や子ら「遺族」であり、次いで考えられるのは過酷な時間を共にした「戦友」である。彼らと骨を遺した死者との間には、肉親として、あるいは同僚・友人として共に過ごしたという明らかなつながりが存在している。この直接的なつながり故に、彼らはときに「遺骨」に「呼ばれる」ような経験をし、また場合によっては自分だけが生き残ったという罪の意識から、自分たちの責務として戦後の遺骨収集活動において中心的な役割を担ってきた。

だが、まもなく戦後 70 年を迎えようとしている現在、遺族や戦友世代の高齢化が進み、遺骨収集の実際の活動に彼らが携わることは困難になってきている。そのような状況で、近年この活動の中心を担うようになったのが、NPO 団体やボランティアの人々である。彼らの多くは死者と直接的なつながりを持つわけではない。しかし遺骨を「日本国民」としての自分たちに「遺された」ものと考え、なんとか日本に帰してあげたいと考える人々である。

本発表で考察するのは、この遺骨とそれを残された人々とのつながりの変容についてである。遺族や戦友が直接顔を知っている死者を迎えに行くのとは異なり、新たな収集活動の担い手たちは人から話を聞き、戦史を学ぶことを通して「戦没者」を想像し、動機を作り上げる。彼らは、自分と遺骨のつながりをどのように考え、語るのだろうか。また搜索や収容活動の現場で実際に遺骨に触れるという経験を通して、彼らは遺骨とどのような関係を築くのか。そしてその関係性は、事前に思い描いていたものとどのように同じで、どのように異なるのか。

本発表では、ソロモン諸島ガダルカナル島において実施されたボランティア団体による遺骨収容活動への参与観察で収集したデータを元に言説、実践の両面から遺骨と人々とのつながりを描き出し、遺族・戦友世代におけるそれと比較した上で、遺骨と遺された人間との関係について考察してみたい。

---

<sup>1</sup> 波平恵美子 2004『日本人の死のかたち－伝統儀礼から靖国まで』（朝日選書）